

放射線診断科 研修プログラム

1 研修先

放射線診断科

2 指導体制

各科・診療部門における指導体制は、別表「指導医及び指導一覧」を参照

3 診療科基本スケジュール

- (1) 研修期間 自由選択研修 4週間 ※自由選択が1回目の研修は当該期間を短縮することはできない
(延長は可) が、2回目以降の研修は短縮することができる。

自由選択研修 2週間コース

(2) 配置予定

	自由選択研修
病棟	なし
外来	指導医のもとで適宜診療

(3) 週間予定表

	午前	午後
月	IVR	CT、MRI の読影
火	CT、MRI の読影	CT、MRI の読影
水	IVR	CT、MRI の読影
木	消化管透視	CT、MRI の読影
金	IVR	CT、MRI の読影

4 研修目標

- (1) 各疾患に対して画像診断が占める役割と限界を理解する。
- (2) 消化管造影や超音波検査の技術の習得、X線単純写真、CT、MRI、核医学検査などの放射線診断の特性・有用性・欠点を理解し、個々の疾患に選択すべき検査法を理解する。
- (3) 造影剤の有用性や副作用およびその予防や対処について学ぶ。
- (4) 放射線被曝の危険性と、その対処法について学ぶ。
- (5) 人体の多方向の断層図（横断、矢状断、冠状断）を理解し、立体的な観察力を養う。
- (6) 当直業務や救急医療の場面において必要となる緊急CTの読影力を習得する。
- (7) 血管造影検査・IVRの基礎を理解し、基本となるセルジンガー法を修得する。

【2週間コース】

- (1) 各疾患に対して画像診断が占める役割と限界を理解する。
- (2) 造影剤の有用性や副作用およびその予防や対処について学ぶ。
- (3) 放射線被曝の危険性と、その対処法について学ぶ。
- (4) 人体の多方向の断層図（横断、矢状断、冠状断）を理解し、立体的な観察力を養う。

- (5) 当直 業務や救急医療の場面において必要となる緊急CTの読影力を習得する。
血管造影検査・IVRの基礎を理解し、基本となるセルジンガー法を修得する。

#	代表的行動	知識	態度	技能
①-1	救急患者のCT・MRIにおいて臨床所見と画像所見を合わせて適切な診断を行う。	●		
①-2	造影剤副作用が生じた患者に対して初期対応を行い、必要に応じてコンサルトを行う。	●	●	
②-1	IVRの適応、合併症などについて術前に上級医とプレゼンテーションを行う。	●		
③-1	画像検査の適応について上級医と話し合い、必要に応じて他科ともディスカッションをする。	●	●	
③-2	画像診断管理加算、撮影料、診断料などについて理解したうえで適切な画像撮影を計画する。	●		

#	代表的行動	知識	態度	技能
①-1	造影剤使用の可否を判断した上で、CT/MRI撮影プロトコルの指示を出す。	●		
②-1	IVR手技の第2助手を務める。			●
	レントゲン、CT、血管造影の被曝線量について理解し正しく患者に説明する。	●		
③-1	放射線科画像における読影レポートの1次読影を行う。	●		

5 経験すべき症候・疾病・病態（赤文字下線付きは必須項目）

経験すべき症候(※1)	特定のもの:なし
経験すべき疾病・病態(※2)	大動脈瘤

※1 外来又は病棟において、上記の症候を呈する患者について、病歴、身体所見、簡単な検査所見に基づく臨床推論と、病態を考慮した初期対応を行う。

※2 外来又は病棟において、上記の疾病・病態を有する患者の診療にあたる。

6 経験すべき手技

7 実際の業務

CT、MRI、RI、一般撮影の読影

消化管透視の撮影と読影

CT、MRIの撮影法指示

IVR検査の助手

【2週間コース】

救急画像診断を中心としたCT、MRI、RI、一般撮影の読影

IVRの助手

8 指導内容

4の研修目標に基づいて、それぞれの目標に沿った指導を行う。

9 方略・評価

日々行われるCT、MRI等の読影をその都度行う他、過去の症例やスライド等の教育資料による講義を適宜行う。

大学で行われるカンファレンスや学会で症例呈示や発表を行う。

【2週間コース】

日々行われるCT、MRI等の読影をその都度行う他、2週間という短期間なので救急画像診断に関する30分程度のミニレクチャーをできるだけ毎日行う。